

## ポストコロナだからこそ患者中心の医療を持続する

### ～川崎協同病院リポジショニング方針～

#### コロナが感染症法上で5類の位置づけに

2023年5月8日に、新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置づけが5類となり、医療機関は、新型コロナに対応しつつ、一般医療を通常に行うことが求められることになりました。

当院は、この時期を見据えて、2023年度方針を固め、基幹型臨床研修指定病院として、救急受入れの強化と病棟機能の再編に取り組んでいます。これを『リポジショニング』の方針と称し、その主な内容は、救急室・中央処置室の一体化と拡張、6階病棟を改修するものです。



ふじさきへ移設しベッドも増えた血液浄化センター

#### 血液浄化センターを協同ふじさきクリニックへ移設し、病床スペースを確保

当院の6階病棟は、これまでスペースの都合で16床しか設置できず、人員配置の面などからすると、大変非効率なものでした。これは、同フロアに外来の透析治療を行う血液浄化センター（22床）があったためでした。昨年10月、この血液浄化センターを、協同ふじさきクリニックの遊休スペースへ移設することで、効率的に病床を設置することが可能になりました。移設後も入院患者用の透析ベッドは病院に設置しています。

病室はそれまで最大6床だった多床室を最大4床に変更し、患者の療養環境を改善しました。



改装して広く使いやすくなった救急・中央処置室

#### 救急室・中央処置室を一体化して効率的な運営に

新しい救急処置室は昨年10月に改装を終え、稼働が始まっています。今後も続くことが予測される感染症対策に隔離室3床を備え、以前は処置室と救急室が離れていて非効率でしたが、今回の改装で一体となり、拡張して使い易くなりました。

ポストコロナ時代のリポジショニングは、当院の医療機能・資源を最大限に活用し、患者中心の医療活動を、持続していくことに他なりません。これまで以上に、この地域の医療に貢献できるよう運営していきます。

#### 新しい病棟に私はこう期待します

急性期医療の充実、何よりも患者の医療要求にこたえることになります。また、臨研病院を維持するのに追い風になり、これは医師だけでなく、全職種の採用あるいは養成にもプラスになることが期待できます。リポジショニングの方針を実行することが、当院の運営を確実に発展させる道であると信じています。

院長補佐 野本朋宏（裏面に続く）

(前面続き)

6階病棟は外科・整形外科の入院医療を中心に行う病棟です。そのベッドが増えることで、外科系の患者の受入調整が、今よりもスムーズにできるようになります。小児科のベッドも確保していますので、入院を応需できるようにマンパワーを整えていけば、地域からの信頼や貢献度も増し、これをモチベーションに、私たちの医療活動は前進していくでしょう。

患者サポートセンター入退院支援課看護師長 正木伸枝

新しい病棟について、看護師体制の不安や病棟を新しく立ち上げるプレッシャーはありますが、でも、この病棟が開設することで、患者の利便性が向上することや、増加してきた手術の対応がより安全に行えるようになると思います。

何より入院患者が元気に退院できるように、スタッフ一同で看護していきます。

6F病棟看護師長 白井千春



開設を控えた6F新病棟

## STAFFもうひとつの顔

### ライブ出演に魅せられて

6階病棟 看護師主任  
百井隼也

川崎協同病院に新卒で就職し気がつけば10年になりました。急性期で6年、COVID-19が流行後は隔離病棟の立ち上げメンバーとして3年、2024年1月からは新たに急性期外科として立ち上がる6階病棟で働くことになります。

変化の大きいタイミングですが、新しい職場作りに向けて忙しいながらもワクワクとした気持ちもあります。



社会人になって2年目の時、同僚が音楽ライブに出演していることを知り見に行きました。年齢も経歴も違う人達が音楽という共通の趣味を通して交流したり、歌や演奏に会場が一体となりみんなで楽しむ空気感に魅せられ、僕自身もその後ライブに参加するようになりました。

たくさんの人たちが見ている中で歌うことは緊張します。歌詞を間違えたらどうしよう、音を外したら、と不安になることもあります。しかしそれ以上に歌い始める前の数秒の沈黙のこれから始まるんだぞというワクワクとした高揚感と、ステージから見る観客の楽しそうな表情、歌い終わったあとの充足感が忘れられず、またライブに出たいという気持ちを強くさせます。

COVID-19の規制緩和によって少しずつ音楽を全身に浴びる機会が増えたら嬉しいです。

